

岩手県の三歳児健康診査における聴覚検査の実態と評価

村井 盛子

盛岡市立病院 耳鼻咽喉科

要約：盛岡保健所管轄6市町村における三歳児健康診査の実態についてまとめ、その健診状況と問題点について報告した。また二施設を受診した要耳鼻科健診児についてまとめ、発見された感音難聴児の状況から三歳児健康診査における聴覚健診の意義を確認した。

見出し語：三歳児健康診査、受診状況、保健所統計の疾患別分類、未受診の理由、二施設の要耳鼻科健診児

Ⅰ 盛岡市における三歳児健診の実態

目的

盛岡市（正確には盛岡保健所管轄6市町村）における三歳児聴覚健診の実態を把握することを目的として統計的な検討を加えた。

対象及び方法

三歳児健康診査（健診）に聴覚検査が導入された平成2年10月から平成9年3月までの6年6ヶ月間の盛岡保健所管轄6市町村の三歳児健診受診児28408例を対象とした。

岩手県の人口は平成8年10月現在約142万人であり、その中で今回対象とした盛岡保健所管轄6市町村の人口は約42万人で県全体の約30%にあたる。また県全体の三歳児健診対象児94874例に対して盛岡保健所管轄6市町村の三歳児健診対象児は28408例であるからやはり、約30%にあっている。

健診方法は厚生省案を採用している。

結果及び考察

1) 三歳児健診受診状況

平成2年度から平成8年度までの三歳児健診受診状況を表1に示した。対象児28408例中保健所を受診した者は26792例（94.3%）であった。そのうち、要耳鼻科健診児と判定されたものは、608例（2.3%）であった。そして実際に耳鼻科医を受診した要耳鼻科健診児は608例中424例（69.7%）と若干低い受診率を示した。

2) 未受診の理由

未受診の理由をまとめて表2に示した。今後受診予定と回答したものは46例（25.0%）と低く、心配していないが24例（13.0%）、不明（転出2例を含む）が114例（62.0%）とあわせて全体の7割以上を占めていた。三歳児健診に聴覚検査が導入されてから7年経っていることからこの制度が浸透し年々未受診児が減少することを期待していたが、この結果をみるかぎりにおいては子どものきこえに対する

表1 三歳児健診の受診状況

例数\年度	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	計 (%)
対象者数	1329	4757	4470	4532	4571	4435	4314	28408 (100.0)
受診者数	1263	4568	4248	4325	4251	4113	4024	26792 (94.3)
要耳鼻科健診児	50	138	99	103	53	66	99	608 (2.3)
受診者数	35	86	64	83	42	53	61	424
	(70.0)	(62.3)	(64.6)	(80.6)	(79.2)	(80.3)	(61.6)	(69.7)
未受診者数	15	52	35	20	11	13	38	184 (30.3)

表2 耳鼻科健診未受診の理由

項目\年度	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	計 (%)
心配していない	4	8	6	1		2	3	24 (13.0)
今後受診予定	1	32	6	3	1		3	46 (25.0)
不明	10	12	23	16	10	11	32	114 (62.0)
計	15	52	35	20	11	13	38	184

表3 三歳児健診受診児の疾患別分類

部位	疾患	件数(件)	頻度(%)
耳疾患 (38.2%)	滲出性中耳炎 (耳管狭窄症を含む)	139	32.8
	急性中耳炎	10	2.4
	感音難聴	2	0.5
	難聴疑い	11	2.6
	慢性副鼻腔炎	54	12.7
鼻咽頭 疾患 (21.9%)	慢性扁桃炎	27	6.4
	アレルギー性鼻炎	12	2.8
その他 (21.2%)	単純性言語発達遅滞	46	10.8
	その他	44	10.4
	正常	145	34.2

*複数回答あり(対424例)

表4 三歳児健診受診児の疾患別分類(二施設)

部位	疾患	件数(件)	頻度(%)
耳疾患 (27.0%)	滲出性中耳炎 (耳管狭窄症を含む)	31	22.6
	感音難聴	4	2.9
	一側外耳道閉鎖症	1	0.7
	耳垢	1	0.7
	慢性副鼻腔炎	5	3.6
鼻咽頭 疾患 (8.0%)	アレルギー性鼻炎	3	2.2
	慢性鼻炎	3	2.2
その他 (45.3%)	単純性言語発達遅滞	19	13.9
	精神発達遅滞	18	13.1
	機能的構音障害	15	10.9
	特発性言語発達遅滞	9	6.6
	吃音	1	0.7
	正常	40	29.2

(対137例)

関心はまだまだ低いのではないと思われる。

3) 保健所統計による疾患別分類

要耳鼻科健診児の中で耳鼻科医を受診し保健所に報告があったものについての保健所統計による疾患別分類を耳、鼻咽頭及びその他に分けて表3に示した。耳疾患は全体の38.2%を占めており、その中で滲出性中耳炎が最も多く、約3割を占めていたが、これは全三歳児健診受診児26792例中の0.5%にあたる。感音難聴は2例検出されている。また難聴疑いが11例あるが、保健所統計のレベルではこれ以上の具体的なことは不明である。

II 二施設における要耳鼻科健診児

目的

三歳児健診から検出された聴覚障害児の具体的な状況を把握し、三歳児健診における聴覚健診の意義をみいだすことを目的とした。

対象

盛岡市立病院及び岩手医大耳鼻科外来を受診した要耳鼻科健診児それぞれ109例及び28例、計137例を対象とした。これは盛岡保健所管轄6市町村の要耳鼻科健診児中、実際に耳鼻科医を受診した424例中の32.3%に相当する。

結果及び考察

1) 二施設の耳鼻科外来を受診した要耳鼻科健診児137例の疾患別分類を、耳、鼻咽頭及びその他に分けて表4に示した。耳疾患は全体の27%を占めてお

り、その中では滲出性中耳炎が最も多く約2割を占めていた。その他単純性言語発達遅滞、精神発達遅滞、機能的構音障害などの言語・構音障害があわせて全体の45.3%と約半数を占めた。アンケートにもとづいて要耳鼻科健診児を決定する場合には言語・構音障害、精神発達遅滞など難聴以外の要因によるとりこみが多くなっていると考えられる。

感音難聴は保健所統計では2例であり(表3)、この2例は共に二施設内からの報告例であったが、二施設における検討結果からは感音難聴は4例検出されている。以下この4例について具体的に説明すると、1例は高度難聴に滲出性中耳炎を合併したダウン症候群の例である。何故3歳まで高度難聴がみつからないでいたかということ、全体的に発達が遅れていた為、1歳半頃までは気付かずにいたが1歳半頃から難聴を疑うようになり、某医を受診している。しかし小さいので様子をみるようにいわれたという。三歳児健診時にことばの発達の遅れ、及び難聴を疑っていることを相談したところ精査をすすめられて受診したものである。ABR検査で両耳共に90dBで反応をみとめず、また滲出性中耳炎及び外耳道狭窄を合併していた。

2例目は1歳半頃からことばの発達が遅れていることに気付いていたが、1歳6ヶ月児健診では様子をみるようにいわれたという。三歳児健診時に精査必要ということで受診している。会話音域三分法で右61.7、左63.3dBの中等度難聴をみとめた。

上記2例共1歳半頃にことばの発達の遅れや難聴を疑っているが少し様子をみるようにいわれて発見が遅れたものであり、重複障害児や中等度難聴児に対する対応のまずさが問題となる症例である。聴力障害は外見上非常にわかりにくい障害であり、聴力障害によっておこる二次的障害(言語発達遅滞など)によって気がつくことが多いこと、また乳幼児期の聴力検査は子どもの協力が得られにくいこともあり、なかなか正確なところが把握しにくく、のみがしてしまうことがありうるわけで、三歳児聴覚健診がこのような中・高度難聴児の取りこぼしの防止

に役立っていることを確認できた二症例である。

3例目は要耳鼻科健診の対象児であり、某医を受診、滲出性中耳炎の診断のもとに治療を受けていた例である。保健所の統計では滲出性中耳炎の中に分類されていたが、滲出性中耳炎が治ったにもかかわらず発音不明瞭が続いたため紹介されてきた例である。会話音域三分法で右40、左38.3dBの中等度難聴であった。

4例目は三歳児健診で保健所を受診した際、ささやき声による検査で絵カードの指示が出来ず、ことばの発達が遅れていることから精査をすすめられたが転居のため精査を受けなかった例である。会話音域三分法で両耳共63.3dBの中等度難聴であった。4例共、現在補聴器装用にて訓練が行われている。

2) また、盛岡市立病院言語治療室を受診した、外因のない両側感音難聴児225例について診断を受けた年齢と難聴の程度との関係を、三歳児聴覚健診開始前と開始後とに分けて検討した(図1:平成2年10月以降の図中の○印は三歳児健診に聴覚健診が導入される前の三歳児健診を受けた例)。

難聴が高度になればなるほど難聴の診断年齢が低くなる傾向があり、特に高度・重度難聴例ではその殆どが3歳前に診断されている。これは聴覚健診開始前と開始後とを比較しても明らかな差はみられなかった。中等度難聴に関しては、●印についてみると三歳児聴覚健診開始後は開始前に比べて明らかに診断年齢が低くなっていることがわかる。進行性の例もありうるので一概にはいえないが、三歳児聴覚健診でとりこぼされ、就学前後の聴力検査で発見される例もまだみられた。また、○印の例は、三歳児健診に聴覚健診が導入されていればより早く診断された可能性があると思われる。

3) 最後に聴覚障害の程度を滲出性中耳炎31例、感音難聴4例について表5に示した。滲出性中耳炎の場合、難聴が軽度であるため聴覚障害に気付かずに過ごしてしまうことが多いと思われるが、なかには中等度の例もあり、三歳児聴覚健診でみつかったということは意義があると思われる。

図1 難聴児の診断年令と難聴の程度 ('86~'97盛岡市病・言語治療室：外因のない両側感音難聴225例)
 ~H2.9

歳	軽度	中等度	高度	重度
0			●●	●●●●●●●●
1	●●●●	●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
2	●●	●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
3	●●●●	●	●	●
4	●●	●●●●	●	●
5	●●●●●●●●	●		
6	●●●●●●●●●●	●●		
7	●●●●	●		
8	●			
9	●			
10				
11	●			
12				
13				
計	0	35	23	40

H2.10~

歳	軽度	中等度	高度	重度
0		●●●	●●●●●●	●●●●●●●●
1		●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
2		●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
3		●●●●	●●●●○	●●
4		○○	●●●○	●
5	●	●●	●●●○	●
6		●●●●○○○	○	
7		○○○○	○	
8	○○	○○○		
9				
10				
11		○○○		
12		○		
13		○		
計	3	39	39	46

*○：旧三歳児健診を受けた例

表5 滲出性中耳炎及び感音難聴例の聴力レベル(良聴耳)

聴力レベル (dB)	滲出性中耳炎 (例)	感音難聴 (例)
~10	3	
~20	14	
~30	6	
~40	3	1
~50	2	
~60		2
⋮		
~100		1*
計	28	4

* 滲出性中耳炎合併
 滲出性中耳炎2例聴検なし

まとめ

1) 保健所健診受診率は94.3%と高率であったが、耳鼻科健診受診率は要耳鼻科健診児のうちの69.7%と低率であった。また、未受診の理由をみると子どものきこえに対する関心がいまだに低いのではないかと思われた。

2) 保健所統計から感音難聴が2例検出された。1例は高度難聴に滲出性中耳炎を合併したダウン症候群の例であり、他の1例は中等度難聴であった。この2症例の検討の結果、三歳児聴覚健診が中・高度

難聴児のとりこぼしの防止に役立っていることが確認された。

3) 二施設における要耳鼻科健診児の診断結果をまとめて報告した。保健所統計では感音難聴2例であったが、更に2例の感音難聴がみついている。1例は中等度難聴に滲出性中耳炎を合併していたために発見がおくれた例である。乳幼児の聴力検査をする場合には、それに関する知識と経験をもっていることが必要であり、信頼できる成績をうるには臨床的な経験の積み重ねと経過観察が特に大切であることを実感させられた。また、もう1例は転居のため健診を受けなかった例であり、保健所同士が密な連携をとり、途中での脱落がないよう努力する必要があると思われる。

4) 診断を受けた年令と難聴の程度との関係を三歳児聴覚健診開始前と開始後にわけて比較した結果、中等度難聴に関しては開始後は開始前に比べて明らかに診断年令が低くなっており、三歳児聴覚健診の意義が確認された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:盛岡保健所管轄 6 市町村における三歳児健康診査の実態についてまとめ、その健診状況と問題点について報告した。また二施設を受診した要耳鼻科健診児についてまとめ、発見された感音難聴児の状況から三歳児健康診査における聴覚健診の意義を確認した。